

第4回伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議 会議概要（無記名版）

日 時：平成 30 年 1 月 24 日（水） 10 時 00 分～11 時 50 分

場 所：伊予市図書館 3 階 三世代交流室

出席者：アドバイザー会議委員 7 名、事務局 5 名、委託業者 2 名

配布資料：資料① 平成 29 年度伊予市図書館・文化ホール等管理運営アドバイザー会議
第 4 回資料

資料② 講座・研修プログラムのご提案および他市事例

1. 開会

- ・ 開会の言葉（事務局）

2. 委員長あいさつ

- ・ 委員長挨拶（委員長）

3. 議事

(1) 市民参画の範囲について(これまでの経緯)

- ・ 最初に、本日やるべきことは市民参画についてご意見を頂きたい。後ほど事務局から市民参画の範囲について、これまでの経緯について説明があると思うが、管理運営計画を 4 年かけて決めてきた。その間で、一番心掛けたことが市民参画で、最初から市民のワークショップをやってきた。子どもの参加も多く、最初は 100 名以上の参加を得た。その後、委員会を作り、ワークショップをやりながら、ここまで進めてきた。本日議題となる市民参画は、伊予市の新しい施設の一番特徴的なことでもあるので、よろしくお願ひしたい。（委員長）
- ・ まず、議事の『(1) 市民参画の範囲について』ということで、これまでの経緯に関して事務局から説明願ひたい。（委員長）
- ・ 近況について事務局より説明させていただきたい。いよいよ明日 1 月 25 日からアウトリーチ事業が始まる。小学校に出向き授業をさせていただくことになっている。PR と地域の団体による発表という内容である。まずは、伊予市のゆるキャラ、ミカンまるが登場し、市民とミカンまるが掛け合いをしながら施設の PR をさせていただく。市民有志の方が、こういった事業にも参加をしてくださることをありがたいと思っている。その後、扶桑太鼓の演奏で学校の子どもたちに聞いてもらい、こういう施設が建つ、こういう活動団体もいるということ PR していきたい。アウトリーチ事業については 25 日を皮切りに、来年度から順次実施になる。（事務局）

- ・ 次に市民組織については、先ほど委員長から話が出た市民ワークショップや昨年まで開催していた分科会の流れから、自主的な市民実行委員会が発足していろいろと活動を行っている。継続的なものにしようということで、毎月ミュゼ灘屋を拠点に集まり協議をしている。基本的にはプレ事業、開館記念事業として何をするか、また組織のこれからの展開について話をしている。毎月 10 名程度、委員長やシアターワークショップ、そして市役所から参加しているが、メンバーが固定的で、まだ醸成をしていない。これからの展開については市役所の方針も加味しながら検討していかなければいけない状況だ。(事務局)
- ・ また、実行委員会が中心となって交流拠点であるミュゼ灘屋を中心にプレ事業を実施している。市民団体の方がこの施設を PR するために、ミニコンサートやフリーマーケットなど、施設に関連付けた事業展開をしている。それは市役所が関わるというよりは、自主的に実施している形だ。市役所としても連携協力という形で、相談をしながら取り組んでいきたいと思っている。間もなく平成 29 年度が終わるが、平成 31 年の開館を見据えて平成 30 年度には本当に注力をしていきたい。(事務局)
- ・ これまでの経緯について、事務局から報告して頂いた。趣旨としては、一つ目は、学校へのアウトリーチを明日から始めるということ。二つ目は、今までの市民参画の中で市民実行委員会が立ち上がっていて、今のところプレ事業として運営しているけれども、メンバーが固定化しがちであるという指摘だった。(委員長)

(2)市民参画の範囲に係る検討

- ・ 資料①の議題②『市民参画の範囲に係る検討』ということで、シアターワークショップより説明をお願いしたい。(委員長)
- ・ まず、資料前半の①市民参画の範囲について、これまでの経緯を主に管理運営実施計画から抜き出してまとめている。市民参画の基本的な方針、具体的な市民参画の例、組織図、を提示している。事業評価に係る市民参画ということで、方針の 3 番目、開館後には公募市民委員を含む施設の運営協議会をつくって、そこで行った事業に対する評価を行うことを検討している。これが今までに協議されてきた内容である。(委託業者)
- ・ ここから先が『市民参画の範囲に係る検討』ということで、具体的に検討していく内容になっている。6 ページ目に、三つのスケジュールを並びで書いている。一番上が事業スケジュール、その下が行政主導で進めていくこと、それから市民組織が主導で進めていくことを書いている。平成 30 年度が間もなく始まるが、まだ工事期間中ということで建物がない状態になっている。そこから平成 31 年度になると建物が竣工し、引っ越しなどの準備をして、ようやく開館する。開館後は実際の運営が進んでいくことになる。事業としては、工事期間中から開館までをプレイベントと呼んでいる。

そこから開館記念事業が始まり、2年目からは通年事業という呼び方になる。これが一番上の事業スケジュールだ。それぞれの期間に対して、行政が中心となって何をするのか、市民組織が中心となって何をするのかという例を書いている。この3年間を通じて、積極的に行政と市民組織が協働していこうというスケジュールだ。スケジュールの後に体制図を書いている。その先は、参考および資料としての他市事例であり、茅野市民館、大船渡市民文化会館・市立図書館リアスホール、和光大学ポプリホール鶴川、黒部市国際文化センターコラーレを取り上げている。(委託業者)

- ・ 補足として、和光大学ポプリホール鶴川というのは町田市のホールである。ネーミングライツでこのような名前になっているのだが、大学のホールではない。町田市は人口40万人を超える比較的大きな町で、鶴川は市内にある駅の名前だ。大きい町でエリアも広いので、そのエリアで新しい市民の集いの場をつくろうということで、できた施設だと聞いている。ネーミングライツで、大学の名前が付いている市立の施設がたくさんある。ちなみに黒部は、こういう施設を計画するときや市民参画というときに必ず視察に行って参考にする所の代表だ。人口4万人で伊予市とあまり変わらない規模の町である。黒部のような規模の町だと非常にきめ細やかに、市民一人一人が見えているという状態の中で、うまくいけば住民が進んで新しい成果を生み出しているということだと思う。(委員長)
- ・ 今、いろいろと教えていただいた他市の事例は、運営組織で関わり方が小さい所から大きい所までという段階があると思うが、大体は、このA、B、C、Dが全部そろった形で、市民参画への活動が行われているということか。(副委員長)
- ・ 紹介している事例だと、大船渡は市民が実行委員会を組織しているが、事業パートナーとしてNPOを立ち上げているわけではない。段階としてはCの事業の企画推進役としての参加まで、市民がやっている例になる。和光大学ポプリホール鶴川の会館記念事業の事例も、実際に自立した団体をつくって業務委託を受けたわけではないので、Cの段階だ。Dの段階に行っている所の事例を今回お持ちしていないが、例えば長野県茅野市の茅野市民館は指定管理者として事業を受けられるような組織まで市民の参加で作りに上げている。本日、お持ちしている事例は主にBからCの段階で市民が関わっている施設だ。(委託業者)
- ・ いきなり事業パートナーとしての参加という例を出しても現実的ではない。段階を踏み、手が届きそうな所からスタートして、その経緯の中で例えば指定管理者を受けられるような組織を作りたいという市民が出てくるかもしれない。そういう思いでBとCの事例を中心に紹介いただいたものと思う。実際、市民の実行委員会で中心となるメンバーの中では、「きちんと会社に近い組織を立ち上げなければ駄目だ。きちんと事業を打てないといけない」という意見も既にある。ただ伊予市の場合は、今はまだ、その意見に人が集まる状況ではない。(委員長)

- ・ 市民が事業の企画にも参加するとなると、どれぐらいの人数で組織されるのか。(副委員長)
- ・ 10名から20名程度が多い。和光大学の事例でいくと11名の市民と行政担当課の職員が協働で実施した。(委託業者)
- ・ その規模の組織が出来ると良いという想定で、今回事例が挙げられているということか。(副委員長)
- ・ その通りである。(委託業者)
- ・ 難しい問題だが、今後の運営主体にも関わってくる。直営管理というところもあるが、やはり市民の間で自立的に施設をどんどん使っていただけるような組織が育ったらいいと思う。施設運営までは難しい部分もあると思うが、施設を活用していくにあたって、そういう核となる組織があったらいいのではないかと思っている。(事務局)
- ・ この会議では、行政の思いに配慮するよりも、こういう形で進めるとよりうまくいくのでは、という議論をいただければいいと思う。(委員長)
- ・ それでは、もう少し中身に立ち入って話を進めてさせていただきたい。6ページに、市民参画に関する活動スケジュールと体制図がある。この区分けでいくと、行政は絶対に行政としてやらなければいけないことがあるので、ここで議論する余地はない。市民が、自発的に貸館利用をして充実した事業をしてもらうことは、施設の収入になってとてもありがたいことなので頑張ってやっていただきたい。本日、一番お話をしたいところは、今のところ市民の実行委員会という形になっている市民組織が、どういう役割を果たすのかである。今、シアターワークショップが挙げた施設事例でも、それぞれでニュアンスはかなり異なる。市民の側から立ち上げたものに行政が寄り添う所もあれば、行政が意図的に立ち上げた所もあろうかと思う。伊予市の場合、今のところ、どちらともいえない状況だ。どれがいいというわけではなく、本日のテーマである、どういうところに市民参画をしていけばこの施設が活用されるか、ということテーマとして議論していければと思う。今のところはA、B、CでいくとCぐらいまで関わりたいというのが、市民実行委員会の思いである。(委員長)
- ・ その通りである。やはり委員長から話があったように温度差があり、本当に自分たちが施設を運営するぐらいまでという方もいれば、何かの形でやるのであれば参加を試みようという方もいるので、BとCぐらいかと思っている。「何か協力したい、参加したい」と思っているけど、参加の仕方が分からないので、なかなかそれに携われないという部分がある。実行委員会がある程度機能を持って、うまく参画する受け皿や機会を作っていければ、多くの人に参画していただけるのではないかと思う。一般の方も含めて、いろいろな立場の方に参画いただけるようになることが理想だと思う。(事務局)
- ・ 運営の話でいくと、施設設備の保守や操作をするハードの面と、企画や事業運営をす

るソフトの面の二種類あるが、ここで議論するのは、どちらかというソフトの面の企画に関わる人たちのことになる。その中心については関わるメンバーを積極的に拡大するという話ではなくて、意識を持った人たちが集まってやっていけるような場としてあればいいのではないかと思う。あとは意識を持った中心の人たちが頑張っていて、地域で活動する人たちがいろいろと増えていく、そこでの参加は広がったほうがいいのではないかと感じる。(委員 1)

- ・ 駐車場整理やチケットのもぎりというような内容は、サポートスタッフとしての参加という B の部分に加え、ハードの運営管理の部分と、ソフトのお手伝いをするという部分があると思う。そのほうが入りやすいので、最初の一步としてそこから入ってくる人たちは比較的出てくるのではないかと思う。次の C の段階は、自分の中に強く思いがある人たちが関わってきて、そこをどう調整しながら実行委員会を作るかという、その二つではないか。ソフトだけではないとは思う。(副委員長)
- ・ 発展形を考えたときに、B の段階を担うスタッフの人たちが発展していくのか、B の段階で止まっていて、新たに C の人たちが加わっていくのかなどについては、少し考える必要があるのではないかと思う。(委員 1)
- ・ 企画だけ言う人が多いところはうまくいかないという実感がある。極端にいうと「ベルリンフィルを呼んでくれ」と言うのだが、予算がどれくらい掛かるか、誰が制作するのか、何人来るのか、チケットがいくらになるかという具体的な話を抜きにしての提案になっていることが多い。言いつばなしになる企画を立てる会議になっている文化施設がいくつもある。うまくいっている所は、自分で汗をかく人たちが周りにいる、本人が汗をかくのは当たり前だということ。そういう状況になっている文化施設は、うまくいっていると思う。これは美術館であろうとホールであろうと変わらない。本日のテーマとして市民参画の範囲を掲げたのは、まさに今お二人が話してくださったような課題があるためだ。例えば事業企画委員会を作ったとして、「企画こうするといいいよね」というのを、言いつばなしの会議も見受けられる。「予算がないので実現しませんでした」と運営者が言って終わりになってしまう。また、企画が 10 出た内の一つだけ実現した、という会もある。伊予市の今までやり方からすると、行政の方も市民の方も、そのような運営したいわけではない。これが 1 点目になる。2 点目は副委員長がおっしゃったことだが、ずっともぎりや駐車場整理をしたいという頼もしい市民もいる。大きな施設の運営の一部を自分が担っているのだという実感を持ちたいという方がいらっちゃって、それでも良いと思う。そこから先の難しい企画や専門的なことは学ばなくても構わないと思う人、知りたいとは思いますが、やりたくないという人もいる。参加の段階がいくつもあって、ある段階でとどまってはいけない、ということは決してない。先ほどもお話に出ていた、企画する人は少数なのかもしれないということとつながるのかもしれない。どういう組織を作って市民の思いを

組み立てていくのか、全ての要望をこぼさずというのは無理にしても、できるだけ多くすくうことができればいいのではないかと思う。当然、多様な市民がいらっしゃってそれぞれの思いがあるので、その中でどこへ落とし込んでいけばいいか、市民実行委員会も手探りで進んでいる状況なので、ぜひご意見をいただきたい。(委員長)

- ・ スタートが100点満点である必要はなくて、トライアンドエラーでやっていかないといけない部分は多くあると思う。ここで発言に対する責任の持ち方のようなものもあるので、現実的にどう合わせていくのかということとは本当に難しいことだと思う。市民が発展ではなくて、自分はこの段階でいい、この段階で関わりたいなど、選択の余地が保証されている必要がある。その選択をするために、こういう関わり方があるのだということを学ぶ場があって、その中で、自分は既に達成感はある、もっと企画に関わっていききたいなどの選択できる余地が出てくるのではないかと感じる。(委員1)
- ・ 今回、事例に挙げていただいた施設はどこも、人材育成講座は実施しているのか。(委員長)
- ・ 実施している。(委託業者)
- ・ その施設の運営をサポートしませんか、という講座はあるか。(委員長)
- ・ ある。サポーターの募集やフロントスタッフであれば、あいさつの仕方、チケットもぎりの仕方というような研修を行っている。(委託業者)
- ・ 企画に関しても研修をやっている施設がある。(委員長)
- ・ 自分はどのような場面でパフォーマンスしたいのか、どちらかという、キャリアデザインのような研修になると思う。当然スキルの研修があってもいいが、そこは選んだ後の話になっていく。それを選ぶまでに、こういう関わり方をしたいという思いを掘り起こすような研修が必要だと思う。それは施設の運営組織だけに限らない分野かもしれない。「やらされている」のではなくて、「自らやっている」という思いになっていくような環境づくりが要るのではないか。(委員1)
- ・ 仰る通りだと思う。私自身も茅野市民館の中にある茅野市美術の『茅野市美術館をサポートしませんか』という講座の第1回の担当だった。そこでは2段階講座をしている。最初は基本編を行う。茅野市美術館はこのような所だという紹介、他の美術館の見学、イベント事を実際にやっている人たちに話を聞くなど。後半部の広がる編、深める編などでは、もう少し深くやりたいことを実現するために何をやればいいのか、費用の面はどうなっているのかなどのお話をする。ホールでも同様の講座を実施していて、最初は間口広く開始して、徐々に中心となる人たちが集まる専門的な講座になっていったのだけれども、来年度は1回、また広げる計画になっている。他の所でも最初、何回かは基本編をやったということだ。基本ということは、入り口ということ。サポーターにならなくても構わない。まずは関心を持ってもらうということが重要だ。気楽に講座に参加できるように試行錯誤をしている。いずれにしても、学びの場を常

に確保し続けることを担保する組織を考えなければいけない。(委員長)

- ・ 学校で社会人向けの講座を行っているか。(委員長)
- ・ 一般の社会人を対象とした講座を行っている。自分たちが学んだことを実際に一般の方々に教えることは、学んだことが本当に身に付いているのかを自己検証する意味でも非常に大事だ。受け身の自分が教える立場になったときに、果たして理解しているのか、身に付いているのかという部分がある。そういった中で、子どもたちが一般の方々と交流し結び付きを持って、思いが伝わることや、できた喜びを知ることは、非常に大きい成長のステップになると思う。(委員 2 委員)
- ・ 具体的には、どのような講座を行っているのか。(委員長)
- ・ 例えばバイオテクノロジーとあって、品種改良によって同じ種類のものを増殖する技術を取り入れて、学校で子どもたちが取り組んでいることを家庭でもできる、あるいは自分の趣味の世界にも広げることができるということや、花の栽培のノウハウを教えるなどというものもある。(委員 2 委員)
- ・ 例えば子どもたちの参加を促していく中で、先に参加している子どもたちが、この施設に関心を持つ人たちに対して話す機会を作る。子どもたちの方が大人よりよく知っていることもある。また、おおよそこの施設でも施設サポーターの活動を知る会がある。その会はサポーターが話をする側に回って、市民の皆さんにここの施設はこのような施設で、われわれはこのような活動をしていてこれほど楽しい、でもこのような苦労があるという話をしてくれる。そういった会は盛り上がることが多い。そういうものと近いのではないかと思う。子どもが話をすると大人は聞くと思うのだが、小学校や中学校では機会があまりない。ただ先輩が参加している話を、例えば小学校だと 5 年生、6 年生が参加しているあるイベントを 3 年生、4 年生ぐらいに話すというのはありかもしれない。学校内でそういうことはあるか。(委員長)
- ・ 本校のルールでは、例えば文化祭の中で各学年が行っている行事から経験したことを発表するという機会がある。海外派遣に行って帰ってきた子どもたちが、そこで学んだことを伝えるような中で、先輩から学ぶこともできる。そういう機会はあるけれども、大人向けにというものはなかった。(委員 3 委員)
- ・ 小学校だと、学年が高い子たちがチケットのもぎりをやってみる、ちらしをフロアで渡すお手伝いをしてみるという経験はできるかもしれない。(委員長)
- ・ 学校の場合は、参観日や学習発表会など、主に学校で学習したことを保護者や地域の方に伝えるというイベントはたくさんやっているが、同じ小学生同士で、いろいろなことを伝え合う機会というのは多くないと思う。(委員 5 委員)
- ・ 今の話では、学校との取り組みの中で施設とリンクしてやれるようなことがあるかをこれから探していく必要がある。市民参画ということだが、市民の範囲があいまいだ。きちんと子どもたちにも参加してもらえるような、自発的に彼らのエネルギーをきち

んと受け取れるような組織や事業を考える必要があると思う。(委員長)

- ・ 世界遺産になっている平泉のある平泉町は、小さな町で中学校までしか地元でない所だ。その図書館のロビーの家具は中学生がデザインしてグッドデザイン賞をもらっている。そのときの関わり方は、子どもたちがデザインしたものを大人がサポートしながら作った。それを自分たちのものとして愛着を持って使うようになった。次の年代は修学旅行で家具のデザイン会社に行って、この家具にはこういう価値があるのだと伝える勉強をして帰ってくる。順次、そこでやったことの価値が伝わっていくような取り組みをしている。年代が替わっても、あの家具の所で勉強したという共通の思い出がつながって、地域に対する愛着に変わっていく。そういう企画を立て、呼び掛けて、子どもたちに来てやってもらう、その循環が生まれてくるような企画ができるといいと思う。ものを作ったら終わりではなく、その価値を順次伝えていける仕掛けによって循環する関わり方ができていくと、スタッフとして参加した経験が次の事業のアイデアに結び付いていくなど、人材育成にもつながってくると思う。単に座学でやるのではなくて、現場で勉強していく場が繰り返されている。その流れがうまくイメージできると、より分かりやすくなっていくのではないかと思う。(委員 1)
- ・ これは子どもの例だが、大人に対しても同じことがいえる。(委員長)
- ・ Cの企画(事業の企画・推進役としての参加)をしたいという人たちはいる。その人たちに市民を巻き込む企画やこれから活用していくための活動者掘り起こしのための企画を、最初もうちに考えてもらえると、B(サポートスタッフとしての参加)やA(鑑賞者としての参加)を増やしていくことにつながっていくのではないかと思う。(副委員長)
- ・ 文化ホールに関しては、伊予市には日本にとどろいている太鼓の集団や、熱心なピアノの先生がいて、彼らはやりたいことがきちんと決まっている。彼らがきちんとやっていることを見せたいと感じる。自分たちで企画をして、予算を取って、苦労しながらチケットを売って、自分たちのイベントをきちんと完結させるということだ。一方で、人を掘り起こすことがとても得意な方もいる。自分たちがやらなくてはいけないことをきちんとやる人たちの活動を見ることが、実施する場を広げていく、サービスを利用していくという企画が両方あると、いま外側の人たちも何か楽しいことをやっているねという雰囲気になっていくと思う。市民参画という意味で、図書館はどうだろうか。(委員長)
- ・ 県立だと県民が対象となるので、広がっていくということとは違うかもしれないのだが、県立図書館では返却ボランティアの方がいる。愛媛県のボランティアネットがあり、そこに登録をしてもらい、返却ボランティアを希望される方は簡単な面接をしている。新しい施設ではないが返却ボランティアに多く希望がある。返却するだけで満足している方や、「本の傷みを見つけた」「ここがきついから動かしてください」な

ど積極的に言ってくくださる方など、ボランティアの中でもいろいろな方がいらっしゃると思っていた。(委員 4 委員)

- ・ 返却ボランティアとは、具体的にはどういう仕事をするのか。(委員長)
- ・ 書架への返却に対応する。利用者が返却した本について職員では対応できる人数が少ないので、本をカウンターでいったん預かっておいて、溜まったら返却ボランティアが書架への返却対応をする。ボランティアは 1 回 2 時間と決まっているので、その 2 時間以内に返せるだけ返してもらう。(委員 4 委員)
- ・ 書架に戻すボランティアということか。(委員長)
- ・ そうだ。(委員 4 委員)
- ・ そのときに本をチェックするのか。(事務局)
- ・ チェックは職員がしている。返却を受けたときにチェックまではして、それぞれの分類別に分かれた棚に置いておいて、それを後でフロアに持っていくのが返却ボランティアの仕事になる。過去は職員で返却をしていたのだが、年々業務が忙しくなり返却に手が回らなくなった。ボランティアの方の募集を始めたら、意外に返却が好きな方がいるのだということが分かった。地味でつらい仕事だが毎日どなたかが来て下さる。これも市民参画だと思っている。(委員 4 委員)
- ・ 茅野市民館のマルチホールは客席がフラットになる仕様で、100 人ごとのワゴンの上に椅子が乗っていて、全部床下に入ってフルフラットになる。客席移動でフラットになる形で利用させていただいたことがあって、「これは誰がやっているのか」と聞いたところ「技術スタッフ、プラス市民でやっている」ということだった。普段使っている施設が完全に平土間になっていくのは不思議だから、その不思議な状況を一緒に体験したいと、事業企画で提案した人がいたと聞いた。ぜひ客席移動ができるようになりたいので、そういう講座をやってくださいということだった。関心のない人にとったら何が楽しいのだろうと思うのだけれども、返却ボランティアと同じような話だと思う。(委員長)
- ・ 掃除のボランティアや草引きのボランティアはとても達成感がある。目の前がきれいになっていくので成果が見えやすく、人気がある。おそらくそれと同じようなことだと思う。(委員 1)
- ・ 今のお話は、そういう人たちをきちんと受け入れて、きちんと達成感を持ってもらえるような窓口が絶対に必要だということだ。(委員長)
- ・ 返却ボランティアはとても参考になった。図書館の機械も、自動貸し出し、返却がどちらもできるようになっているが、図書館によっては、返却はやはりチェックしてからというところがある。というのは、やぶれていたり汚れていたりということが発生するからだ。それをどうするかということは、図書館にとっては大きな悩みである。返却はとても大変なことなので、それをボランティアに任せられるということは、非

常にありがたいことだと思う。こちらが大変だと思っているところを、上手にマッチングさせることができれば本当にいいと思う。(事務局)

- ・ 今とても大切なキーワードが出てきた。人手が足りない所を補うということだが、多くの場合やらされている感が出るので、それを何とか楽しくできるような工夫が必要だ。やりたい人もいるので、仕掛けと共にきちんと広く呼び掛けることが重要だ。図書館の場合は楽しくてやっていると思う。(委員長)
- ・ 不思議だが、そういうことだと思う。それから本の修理や補修にボランティアを使っている所もある。きちんと補修の講座を受けているということだ。単にやりたいからという話ではなくて、いろいろなイベントなどを企画運営して華やかなことをしたい方もいる反面、地味なことをコツコツとやりたい人もいる。(委員 4 委員)
- ・ 私も本が好きなので、自分が関心のない分野でも、本に触れていると楽しいという気持ちは分かる。今出てきた話は、企画や施設の運営、資料でいうと C・D に当たる所ができれば成功というわけでは必ずしもない。鑑賞者が多くいることが大前提だ。施設の裏方と呼ばれる人たちがたくさんいて、その中でどのような形でもいいから自分の一つの達成感が得られる、やらされている感がなくモチベーションが保てる、楽しそうなことに参加させてほしいという人を受け付ける窓口の確保をきちんと行わなければいけない。また、そのことに関する手当も必要だ。館側のスタッフの人手も必要だ。企画に関わりたい、行政がやるよりは自分たちが経営してきた会社のノウハウもあるし、絶対にわれわれがやったほうがうまくいくという人たちが、例えば指定管理者に手を挙げる、新組織を作って手を挙げるということを、ある程度見据えて市民参画を考える必要があると思う。(委員長)
- ・ この場所を使って、活動していく人たちを増やすことも市民参画として必要だと思う。そのときに、やってみたいけれども、いきなり大きなイベントは打てないし演奏会もできないという人たちがサポートしてもらうことで機会をもらって演奏できるということになれば、次の人を育てていくことにつながると思う。演劇関係で CTT という組織がある。舞台をするには、普通であればかなりお金が掛かる。受付も必要で、舞台上の作り込みもしなければならぬ。それを、CTT 事務局がサポートしてくれるのだ。少しお金を出せば、そういう場所を提供してくれる。そうすると、次々申し込んでくる新しい人が出てくる。やってみたいけれども、サポートがないとできない人たちをサポートしてあげることで、活動を広めていくことができる。そういうサポートができる場所があるといいと思う。(副委員長)
- ・ 今のお話は実は大変大きなご提案だ。なぜかという、市民が貸館で利用したいときに、貸館で借りるとするのは大きなハードルである。借りてもいろいろ大変なことがあってできないのではないかと考えてしまう。貸館率が高い施設は、見えないところで館側がそれをフォローしている。例えば、子どもたちのピアノ発表会をやるのに、

このような手順でやるとうまくいく、というノウハウをきちんとためていて、シートになっている。それ一つで、あそこはきちんとやらせてくれるという話が伝わって、貸館率が上がってくる。しかし、そこのスタッフが習熟していない、ないし足りない場合には、鍵を貸すだけになるので、貸館率は下がってしまう。例えば、学校で新しい市民会館を使いたいというときに、学校に体育館を使う以外のノウハウがない場合、館のスタッフのサポートがないとできない。それをきめ細やかにできるかどうか。もう一つには CTT のように、演劇に特化したり、コンサートに特化したり、先輩がこうやってる、他の事例ではこうやってるから上手くいくなど、講座で学ぶという場が出来れば、機会創出になる。いくつかのパターンに対して、館のほうできちんと手当ができる体制があるかないかは、とても重要だ。(委員長)

- ・ 市民活動をサポートする中間支援的な役割を持つところが、演劇部門や音楽部門などで生まれてくると、コスト的にはあまり負担しなくて、連携でやれることも出てくる。本来的には全部抱えてやっていくのがいいと思うのだけれども、現状はかなり厳しい。そういうことをサポートしてくれる人たちとコラボレーションできる関係ができたらいいいと思う。そういう意味では、現状なかなか愛媛県では難しい。(委員 1)
- ・ なぜ難しいかという先ほど話したピアノの先生や扶桑太鼓の活動も、自分の所のことで精いっぱいだ。社会性を発揮してアウトリーチに参加頂いているが、交通費もいだけないようではしんどいという話をされるぐらい、精いっぱいやっている。なのでノウハウをうまくためられると良い。例えば郡中小学校でやったノウハウがあって、他の学校がやりたいというときには郡中小学校ではこうやって、同じようにやれということではなく、このような問題点と、このような工夫があったということが、きちんと受け継がれると次がやりやすくなると思う。(委員長)
- ・ 市民参加の事例の中で、黒部のカラーレの事例として挙げている専属上映団体の補足をさせていただきたい。今、どちらかという活動をしている人たちを支援していく、中間支援的な話が多かったかと思う。黒部の場合には実際に舞台に立つ集団を組織している。まずは、子どもたちの活動から始めようということで作ったのがリトル・カルチャークラブというものだ。本日は学校の先生がいらしているので、学校の部活動を学校の先生が賄うのは大変だということもあるし、学校単位ではなかなか大きな動きにならない。であれば、新しくできる施設が、部活動の代わりにホールが活動の場となるような事業の展開の可能性はないだろうか。ご意見を伺いたいと思う。
- ・ 以前、学校が忙しいという話が出ていた。その中でうまく利用していただくにはどうしたらいいかを考えましょうという話をしていたと思う。(委員長)
- ・ 確かに港南中学校は大きいですが、本校も含め、生徒数が少ないところもある。同じような趣味があっても、人数が不足して活動できないという現状がある。また教える者の専門性があるかないかという問題もある。そういうもののノウハウを持っている

方が、校外での活動としてされる中に、子どもたちが参加をすることは可能だと思う。趣味を同じくする者たちが集まっている場があれば、参加をする者は出てくると思う。

(委員 3 委員)

- ・ 学校のクラブ活動と、バッティングするというものとはまた違った形でということか。
(委員長)
- ・ 学校の部活動は、人数が少なく、全て網羅して活動ができるわけではない。そういう所の子どもたちの中に、本当はこういう活動をしたいと思っている子がいるのかもしれない。可能性は十分あると思う。(委員 3 委員)
- ・ 中学校の場合は、先ほども委員 3 校長先生が言ったように部活動があるが、小学校の場合は、基本的に部活動がない。その代わりに、運動系の習い事をしている子どもが多い。例えば、伊予市であればサッカースクール。このサッカースクールに、いろいろな学校の子どもたちが集まって土日に活動している。そういったことを考えると、この図書館、文化ホールを使った文化的な活動を立ち上げていただくことによって、それに興味のある子どもたちが市内各所から集まって、活動ができる可能性は十分あると思う。(委員 5 委員)
- ・ とても心強いお言葉だ。高校はどうか。(委員長)
- ・ 私は、伊予市のホールがあった時代も知っているがなくなってからは、松前総合文化センターを使用している。松前を使用するようになって 5 年ほど経った。一度、松前の管理者や技術職員に 1 日協力いただき、役付きの先生と生徒が舞台の使い方を教えていただいた。そのときに教わったノウハウは、年度が替わっても生きてくる。照明の使い方にたけた子どもたちが出てきて、これはなかなか使い勝手がいいとなってくる。教えてくださる方がいるかないかで、全く違うということを非常に実感している。先ほどの小中学校の課外での活動、土日での活動という面においてだが、高校生は帰宅部が随分少なくなり、何かに所属している生徒が多い。しかし、学校として把握はしていないが、文化的な面で学校外の活動を行っている生徒も多いと思っている。そういう意味では、地域のそれぞれの団体に大なり小なり所属している子が集まって活動や練習ができる文化ホールなどの施設が出てくるのは、ある種、異年齢の層を串刺しにできることになるのではないかと思う。今回のアウトリーチの扶桑太鼓には本校の生徒が何人か入っているが、やればやるだけ学習効果、波及効果はあるのではないかと思う。(委員 2 委員)
- ・ とても心強い話だ。(委員長)
- ・ 今、A、B、C、D とあるが、究極はやはり舞台上に立ってスポットライトを浴びるのが、E レベルかもしれない。(委託業者)
- ・ 裏方ではなくステージに立つということか。(委員長)
- ・ その通りだ。(委託業者)

- ・そこを目指す、あの人が立てるのであれば私も立てるかもしれないということが本当に出てくる。内子町では子ども狂言を実施している。茂山千三郎氏が定期的に来てくださり、子どもたちは爆発的に上達する。また、お兄ちゃんがやっていると弟もやりたがる、あの先輩がやっているなら私もやりたいなどで、参加する子どもが増える。一番上手だった子が中学生になったが「今、俺は狂言をやるか、サッカーをやるかの瀬戸際に来ている」と言っていた。どちらもそう簡単にプロになれないのだが、そういうことを言うようになる。普通の男の子だけれども、そういう子が出てくることは確実にある。ある場がきちんとあって、そこにきちんと指導者がいて、子どもたちの自発性を生かしながら組織を作っていくと、子どもはきちんと付いてくるし成果も上がるということだと思う。コラーレの場合は専門家が指導するという講座の開催はあるのか。(委員長)
- ・専門家指導の場があり、そこで指導を受けていた子どもたちが音楽大学へ行って、また戻ってきて、今度は指導者に回っていくという循環ができてきた。(委託業者)
- ・市民組織とは違う形で、きちんと枠組みを作ることは必要だということだと思う。既に市民の実行委員会ができていて、ここでは扶桑太鼓やピアノの先生を中心に具体的なことが動き始めている。小さいイベント、プレ事業という名前を冠して事業を打っている。また打っていきたいという思いも醸成されている。活動スケジュール、体制図、運営組織という辺りで、もう少しご意見いただければと思う。100点満点でなくていいと私も思うのだが、どこから始めればいいのか。(委員長)
- ・決断が要ることだと思う。(委員1)
- ・決断というのは、市民の側の決断という意味か。(委員長)
- ・その通りだ。(委員1)
- ・行政側の決断も必要になる。(委員長)
- ・あとは、その決断に責任を持ちながらブラッシュアップしていけるような気持ちをお互いに持ち合うことが重要だと思う。いずれにしても決めていかないといけないので、そこは官民で話し合いながら決めていって、うまくいかなければ変えればいい。決めるというとあまりにも重たいので、いい表現が見つからないが、いい社会実験ができたらいいと思う。(委員1)
- ・今、委員1から、とてもありがたいお話をしていただいた。実は管理運営計画を決めるときに、10年動かさない計画にするつもりはないということを再三申し上げている。学校との連携もそうだが、やってみなければ分からないことが多い。最初からガチガチに決めてしまって、失敗して、やはりやるべきではなかったとお互いが思うことだけは避けたいと思っている。管理運営計画というのは、その施設の運営の基本のようなものだが、開館時間や利用料金も含めて3年をめぐりに変えていくぐらいのつもりで決めたいと思う。事務局とも相談をして、そういう方針で進めたいと思っているが、

これは組織も同じという理解で良いだろうか。(委員長)

- ・ その通りだ。基本的な憲法はあまり変えないが、それを示した上で勇気を持って変えていくということも必要だと思う。変えていくことを市民も受け入れていかないといけないということだ。当然そうなったプロセスが公開されることは前提になる。そうして市民の理解者、サポーター、応援団を作っていければいいのではないかと思う。そのように活動していくと勝手連、勝手に応援する会みたいなものができてくることもあるのではないかと思う。(委員1)
- ・ 子どもたちが勝手にグループを作って応援しているという例を聞いたことがある。福島県いわき市で いわき芸術文化交流館 いわきアリオスという大きな施設を放課後に勉強する場所として子どもたちが使っている。子どもたちの間で、それ専用の SNS があり、混雑状況を知らせる、騒いでいる子がいると自然に注意する、言葉に出すのではなくて、あのエリアがうるさいというメッセージが回って、自分たちがうるさいのだということが、そのネットワークで分かるなど、そのようなシステムが成立している。それは館側が仕掛けたわけではない。子どもたちの居場所になりそうなテーブルなどを置いていく中で、死角は作らないがそっとしておいてあげるというポリシーを施設側が守っているうちに、図書館は静かにしていないといけなくて、共通スペースのような所で、話をしながら宿題をやりたい子どもや悩みの相談がしたい子どもが集う空間ができていった。そして子どもたちはその空間を自分たちでコントロールしている。それが完全にできあがって安定してから、館側の責任者が教えてもらったという話だ。(委員長)
- ・ そこが自分たちの居場所という実感を持てると、そういうことができるようになる。お互いが勉強し合う、上下の関係ができる、そこを変に仕掛けるのは難しいのだが、自然に生まれてくれるような環境づくりをしていくといいのではないかと思う。それは空間づくりからスタートして、与えられた空間でやりなさいではなくて、そこをどうするかということについて一部分でいいのだが関わっていけるようになれば、変わってくるだろうと思う。(委員1)
- ・ トライアンドエラーというのは、何にトライするのか、どうエラーをして、それをどうフィードバックするかという難しいことがたくさんある。一つは、いろいろな市民がいる中でいろいろな思いをきちんと受け止められる場所を、それぞれの形で確保していくことが必要であるということだ。それは子どもに関しても同じだ。小学校、中学校、高等学校など、それぞれの社会的な環境によっても立場が違うわけだから、そういった子どもたちの居場所であるとともに、何か事業があったときにそれに参加して、子どもたちが成長していける場であり、そういうことを確保するような、組織や体制も必要だということが分かってきた。(委員長)
- ・ その中で選択の余地が必要だという、一つのキーワードがある。こちらが思う市民像

に近づけていく、子どもたちのゾーンに近づけていくということではない。学校や会社は一つの目標がある程度はあるが、そうではない場所、サードプレイスとして機能するためにも選択の余地が必要だ。余地をどう作るかは難しいが考えていきたい。それから、委員1からあった、市民の側も行政の側も何か事を成すときに一定の決断が必要だということ。それはずっと動かない決断ではなく、トライアンドエラーができるような決断ではあるが、それでも決断はしなければいけないと思う。責任を持って、お互いが実行できる仕組みが必要だ。(委員長)

- ・ その通りだと思う。1年やってみて駄目だったら変えましょう、1年たつてうまくいけば、そのまま続けましょうという、区切りの期間を決めておくこともとても大事だと思う。変えていくことができるチャンスを用意していると決めやすくなるし、トライしやすくなる。(委員1)
- ・ ガチガチに一方的に決めて失敗する話もよく聞く。人も変わるし、思いも変わるし、社会も変わっていく。そういった中で条例のようなものはそう簡単に動かせないのでよく検討する必要がある。今、条例の策定の進捗はどうなっているのか。(委員長)
- ・ 6月制定を目指して庁内調整を進めている。(事務局)
- ・ 条例はいわば憲法のようなものだ。市民との関係や市民参画の仕方も、ある年限を示しながら手直しをしながら進めていくということになるのではないかと思う。(委員長)
- ・ 変えるときは勇気があるものだ。今までやってきたことを踏襲するのが一番楽な方法ではあるが、そこを改めてきちんと議論することはとても大事だと思う。(委員1)
- ・ ある事例の話だが、共通スペースが広く、そこはホールのロビーとして使うこともあれば、美術館の展示スペースとして使うこともあるから、何も置かないというのが最初の決まりだった。ところが子どもたちの居場所がない、市民が休むことができる場所がないということでテーブルとイスを置いたところ、利用率がとて高くなったという事例がある。午後3時以降は必ず子どもたちがいるそうだ。そしてきちんと譲り合ってやっている。しかし、そのように変えることは大変なことだった。管理運営計画は共通スペースも利用料金が発生する。今時の施設は利用料金が発生しないスペースはない。占有しているのにその主体たる利用者が料金を払っていない状態を作るということに対して、どうすればいいかという議論があったが、決断して変えたところ、とてもいい場所になった。かえって環境が良くなり、お互いに目が行き届くようになった。どこの施設もそのようにトライアンドエラーでやっている。変えるときはそれなりの勇気が必要だ。3、4年は動かなかったが、一度やってみましょうという話になって検討が進んだという経緯がある。そういうことは、実際の運営の中でたくさん出てくると思う。(委員長)
- ・ 平成30年度はいろいろなことを進めていかなければならない。行政側としては、やはり人材育成の研修をやってきたい。これに対しては次回の議題の中心になるかと思

うのだが、導入案としてシアターワークショップから資料②の説明をしていただければと思う。(事務局)

- 資料②は、講座研修プログラムの提案および他市事例になっている。一番左側の「ご提案」というところに、今回の伊予市の施設での研修の案を書いている。その他は、他の施設で行った講座の事例だ。次回、こちらが議論の対象になってくるかと思う。今考えているプランとしては、最初に『伊予市の魅力でクイズをつくろう』。先般のアドバイザー会議で提起しているような事業、伊予市の魅力発見事業の一環としてクイズづくりをするという楽しいイベントを導入編として設けようかと思っている。それから最後には講座終了イベントとして、いろいろと学んできた施設の工事中の現場を見学することを検討したい。これは担当部署や現場の都合があるので調整が必要になるが、そういう会を設けることができればと思っている。講座の内容としては、4月から5月で、まず『図書館の魅力と可能性』の講座を行う。続いて『文化ホールの魅力と可能性』、そして『文化施設サポーターボランティアの活動について』ということで、網羅的に、実際に今サポーターボランティア活動というのほどのようなものがあるのか、今、どのようなことしているのかを紹介する講座ができればと考えている。考え方としては施設についての基本的な考え方を学ぶと同時に、ワクワク感を作っていきたい。やってみたい、の初めの一步を踏み出すためのきっかけづくりと手助けを行うような講座を、イベントを含めると8回、内容だけであれば6回の講座で考えている。その一方で、今立ち上がっている市民組織の中で、事業の企画を作りたいという人たちもいるので、発展的な内容として基本講座と別枠で、事業の企画に特化したような講座を検討している。それ以外は他の施設の事例なので、次回に詳しく説明させて頂く。(委託業者)
- では次回は先ほどシアターワークショップからあった提案の詳細説明と、それに関わる議論をして、よりよいものにしていきたいと思う。また年度末のお忙しい時期になろうかと思うが、よろしく願いしたい。(委員長)
- 先ほどの提案に対して、また皆さまからの助言をいただけたらと思う。また実行委員会、市民の皆さんからもこういったような講座が良いというようなご意見も聞きたいと思っている。先程ミューゼ灘屋のお話をしたが、その中庭部分に学校の生徒たちで素晴らしい庭を造ってもらった。作り上げたときに涙が出たというような話を聞いている。そういった場も市民が作りはじめている。トライアンドエラーということであれば、双海の図書室がサードプレイスとして「実験台にしてい」と公言してくれている。本当に色々な立場の方が考えてくれているので、何かしらの形で、上手にかみ合わせていけたらいいと思う。(事務局)
- 講座や研究が目的ではなくて、手段と考えるといいかと思う。学ぶことが目的ではなくて、学んだものをどう使うかという発想だ。体験や発表を含めて何のために学ぶの

かが大事だ。こういうときに、子どもたちはいい大人に出会う、大人はいい人に出会うということが、とても大事になっていく。そういうことをぜひ考えていただきたいと思う。(委員1)

- ・ 次回は、そういうことを深めて考えたいと思う。先ほどの庭の話もそうだが、子どもたちの力はすごいと思う。(委員長)

(3)その他

- ・ 次回のアドバイザー会議の日程について、会議後に調整し下記に決定した。
- ・ 3月13日(火)10:00～

4. 閉会

- ・ 閉会の言葉

以上